

前号に引き続き、歯科(当クリニック)での「遺伝子検査」のお話をしたい。

現在、私のクリニックで行っている遺伝子検査は、親から受け継いだ体質(遺伝子)と、環境的な原因でみられるガン関連発現遺伝子に関する検査だ。

まったく同じ検査が、大阪大学付属病院・予防歯科外来でも行なわれている。肥満・糖尿病・高脂血症・高血圧などの体質遺伝子検査だが、狙いは「歯周病が『生活習慣病』と大きく関係している」ことによる。

生活習慣病の体質遺伝子検査を通して、患者さんの健康に対する意識を高め、生活習慣を見直し口腔疾患に罹らないようにするという「超早期予防」が実現できる。

例えば、検査で糖尿病にかかりやすい遺伝子が見つかった場合、食事

## 十 未病の憂い

歯科医が語る現代版養生訓

や運動、睡眠などの生活習慣をかなり早い段階で見直すことができる。

体質(遺伝子)検査は、頬の粘膜を採取する簡単なもので、歯科大学などでも導入検討中とも聞くが、国内歯科医療の現場で遺伝子検査を行う大学や医院は少数派だ。

これらの検査は口腔インプラント治療の場でも有効な検査だ。

口腔インプラント治療は人が生きるために最も大切な「咀嚼機能」を飛躍的に回復させて人生のQOLを高める医療として世界的に普及した。

## 「遺伝子検査」で、全身的な健康管理を

我が国でも高齢者における健康についてのアンケートで「よく噛めること」がトップになっていることでもわかるように、インプラントの普及スピードは著しいものがある。

しかし、この治療で悩ましいのが、インプラントを植立した後の「口腔内生存率」。人によっては三十年以上機能を果たしているケースもあるが、その反面五十年というケースもある。原因としては局所の清掃状態や噛み合わせの継時的な変化が主に考えられるが、生活習慣病や骨代謝障害も考えられる。

私のクリニックではレントゲン検査などの結果から、長期にわたって機能を果たせるかを見極めるために必要に応じて、骨代謝に関する遺伝子や糖尿病に関する遺伝子の検査を行っている。

五十八歳の女性の例を挙げる。上顎の奥歯がすべて欠損していたため、長い間前歯で噛んでいたために、最近前歯もかなり動揺してきた。入れ歯は嫌なので奥歯にインプラントを希望されて来院した。

骨の深さが2ミリまで痩せており、このままではインプラントは無理。そこで、人工的に骨を作る「骨再生手術」を必要とした。

この女性患者の場合、遺伝子検査で、骨代謝と、インプラントには大敵な糖尿病に関する遺伝子検査でやりスクが高いとの結果が出た。インプラントができないという結果ではなく、インプラント後は、口腔内に加え、生活習慣に関する「全身的な健康管理」が必要となる。

インプラントを例としたが、今日では、歯科・口腔外科の治療でも「全身的な健康管理」という視点なしに、患者さんと向き合うことは、不行き届きだと考えている。

「歯科・身体総合医療」を当クリニックは提唱しているが、長寿社会での患者さんとの新たな関係づくりには欠かせない、歯科医としての信念である。

顎関節症  
ドライマウス  
舌痛症

長栄歯科クリニック  
亀井 英志  
Kamei Hideshi

ストレスは  
見える！  
すべては「噛みしめ」が原因だった

気がつくとも歯を食いしばっている。…心当たりの方は、当コラムの亀井医師の著書『すべては「噛みしめ」が原因だった』をお読みいただきたい。未病、の原因をまとめた良書です。

亀井英志(かめいひでし)

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

